

荒瀬水路歴史探訪ウォーキングコースの概要

大分県中津市

○行程

(始点)①青の洞門(本耶馬溪町)→②荒瀬井堰(オランダ橋、荒瀬井堰起源の碑)③鮎婦(荒瀬水路トンネル沿)→④三光村土田(景観保全型水路改修)ここまで 徒歩4.5km→ここからバスにて約8分移動→⑤新分水→⑥大池→⑦御澄池(終点)ここまで徒歩にて2.5km→バスにて始点まで移動(解散)

○コースの説明

荒瀬井堰水域は、真坂・山口・大幡・鶴居・三保・如水・今津と旧八か村にわたる、山国川と犬丸川に挟まれた標高20～30mの丘陵地帯で「下毛原台地」といわれているところです。荒瀬井堰は大分県と福岡県の県境を流れる山国川を用水源とし、本耶馬溪町の名勝「青の洞門」直下流に取水口を置き、1,105ha以上の受益面積を持つ、幹線、支線併せて60kmに及ぶ農業用水路です。その歴史は古く、貞享3年(1686年)豊前中津藩三代藩主小笠原長胤のときに着工し、「堀り屑一升、銭一升」といわれた過酷を極める難工事の末、10数年の歳月をかけて完成しました。これは江戸幕府の箱根用水に匹敵する大事業といわれております。当コースは、荒瀬水路取水口からほぼ水路沿いに走る自転車専用道路(旧耶馬溪鉄道敷跡)を移動しながら、各所に残る水路に関する史跡や水路を見学しながら、前記荒瀬水路の歴史を訪ねるとともに、現在実施されている水路改修状況と併せ、水路の維持管理の大切さと、地域用水としての多面的機能の役割を体験認識できる。

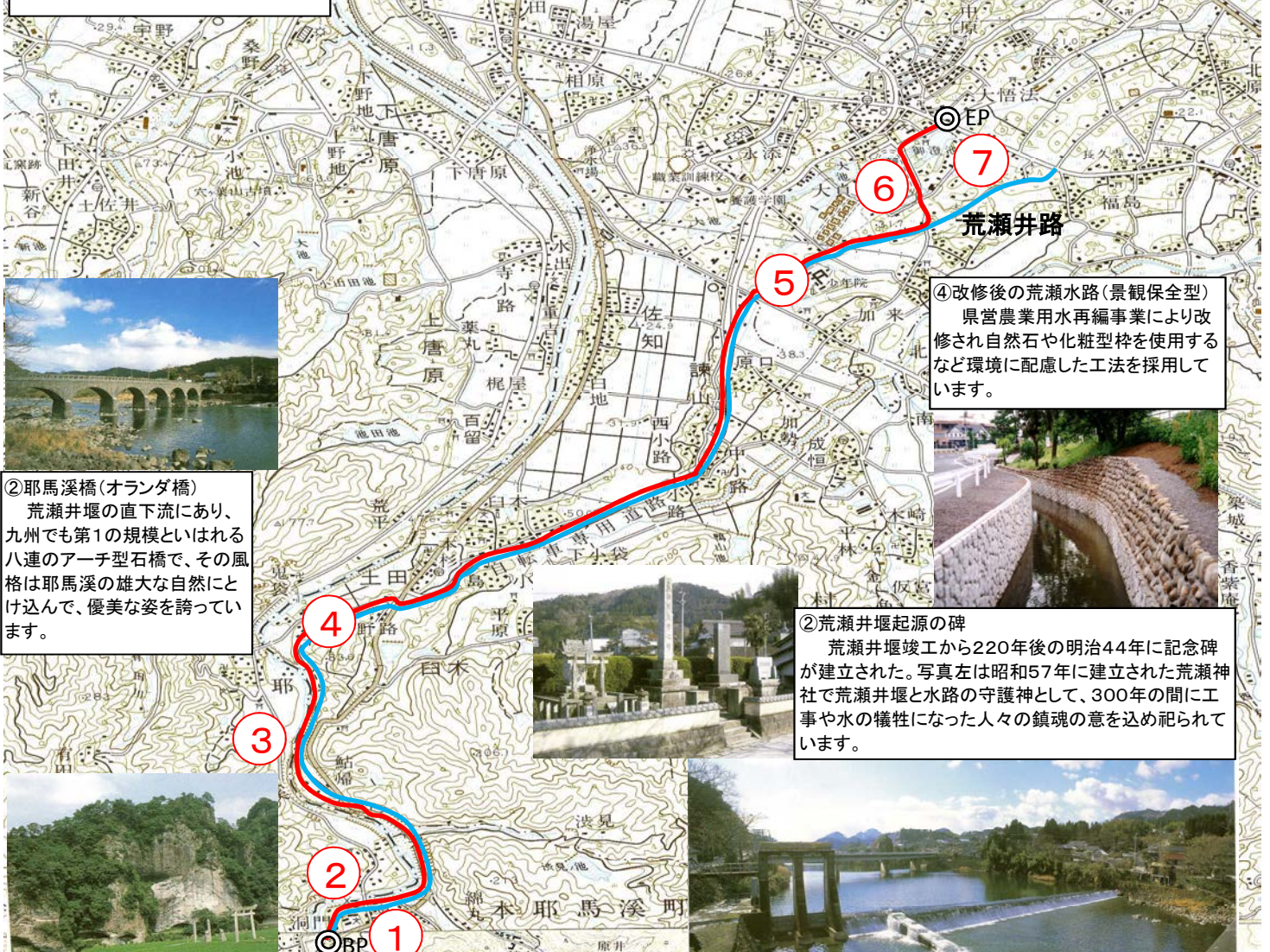
⑤新分水

明和元年(1764年)に用水の分配や修理など運営上の経費や賦役の負担の基本を取り決めた「明和規定書」が作られました。この定めが分水口に設けられた配賦板(仕切板)の寸法に200年後の現在でも厳然と守られています。



⑦御澄池

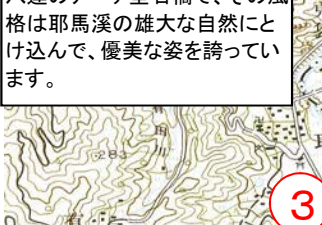
荒瀬水路水系のため池群の一つで、宇佐八幡宮の祖宮といわれる薦神社の御神体(内宮)となっている。面積4.9ha、貴重な水性植物群(マコモ、ハンノキ、ジュンサイ)をはじめ、多くの動植物が生息、白鳥、鯉等も飼われています。



②耶馬溪橋(オランダ橋)

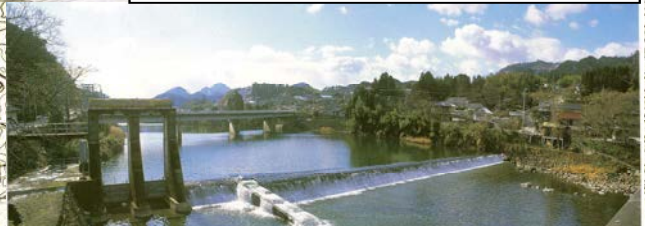
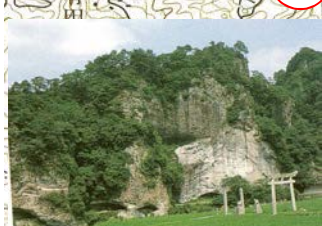
荒瀬井堰の直下流にあり、九州でも第1の規模といわれる八連のアーチ型石橋で、その風格は耶馬溪の雄大な自然とけ込んで、優美な姿を誇っています。

④改修後の荒瀬水路(景観保全型) 県営農業用水再編事業により改修され自然石や化粧型枠を使用するなど環境に配慮した工法を採用しています。



②荒瀬井堰起源の碑

荒瀬井堰竣工から220年後の明治44年に記念碑が建立された。写真左は昭和57年に建立された荒瀬神社で荒瀬井堰と水路の守護神として、300年の間に工事や水の犠牲になった人々の鎮魂の意を込め祀られています。



①青の洞門

1734年禅海和尚によって掘り始められた隧道は、29年の歳月を経て開通しました。この間の幾多の苦難を題材にした、菊池寛の小説「恩讐の彼方に」の舞台として有名です。

②荒瀬井堰

荒瀬水路の取水口で、貞享3年(1686年)豊前藩主小笠原長胤により着工。この堰による水位上昇により、後年(1734年)禅海和尚による「青の洞門」着手の原因となりました。